

# ゲームプログラミング

## DirectDraw - 第 11 回 リージョン

リージョンはDirectDrawの機能ではなくデバイスコンテキストの機能ですが、円形や星形といった矩形以外の図形でクリッピングを行うことができます。

### リージョン

DirectDrawのクリッパーは、矩形(長方形)しか設定することができません。矩形以外、たとえば円形や星形といった図形でクリップをすることはできません。このような図形でクリップするには、1ピクセルずつ計算して描画する方法もありますが、デバイスコンテキストのリージョンという機能を使うと簡単に実現することができます。

リージョンを扱うAPIはいくつかあり、矩形、円形、多角形といった基本的なものから、リージョン同士を合成するものもあります。複雑な図形は、リージョンを組み合わせることによって作成することができます。

リージョンはデバイスコンテキストに設定することによって有効になります。DirectDrawの機能ではないため、BltメソッドやBlitFastメソッドで転送しても効果が現れません。従来のBitBlt関数やStretchBlt関数で転送する必要があります。そのため、フリップやカラーキーなどといったDirectDrawの機能使用しながら転送することはできません。

### リージョンの作成と設定

リージョンは、Windows内部で管理されており、HRGN型のハンドルをとおしてアクセスします。プログラムからはAPIを使ってアクセスし、直接操作はできません。

リージョンを作成するAPIは、以下のように基本図形ごとに用意されており、頂点座標を与えるだけで簡単に作成することができます。

CreateEllipticRgn関数	だ円形リージョンを作成します
CreatePolygonRgn関数	多角形リージョンを作成します
CreateRectRgn関数	長方形リージョンを作成します
CreateRoundRectRgn関数	角の丸い長方形のリージョンを作成します
CombineRgn関数	2つのリージョンを結合して新しいリージョンを作成します

基本図形以外のリージョンは、CombineRgn関数でリージョン同士を合成することによって任意の形状のリージョンを作成することができます。

これらのAPIでリージョンを作成すると、リージョンのハンドルが得られます。このハンドルを使い、SelectClipRgn関数で転送先デバイスコンテキストにリージョンを設定します。設定後にBitBlt関数などで画像を描画すると、リージョンで設定されている領域だけ描画されるようになります。

リージョンを解除するにはSelectClipRgn関数の2つ目の引数にNULLを渡します。必要なくなったリージョンの解放はDeleteObject関数で行います。

### 課題

リファレンスでリージョンを扱うAPIについて調べながら、リージョンの効果を確認しましょう。

(1)以下のプログラムは、CreateRoundRectRgn関数で作成したリージョンを使ってオフスクリーンサーフェイス1の画像をバックバッファに転送する関数です。どのような結果になるか確認しましょう。

```
/*
 * リージョン付き転送
 */
void RgnBitBltBG()
{
    DDColorFill(DDS_BACKBUF, NULL, RGB(0, 0, 0)); // バックバッファクリア

    HRGN hRgn = CreateRoundRectRgn(80, 60, 560, 420, 20, 20); // リージョン生成
    if(NULL != hRgn) {
```

```

HDC hDestDC = DDGetDC(DDS_BACKBUF);
HDC hSrcDC = DDGetDC(DDS_OFFSCREEN1);
if(NULL != hDestDC && NULL != hSrcDC) {
    SelectClipRgn(hDestDC, hRgn); // リージョン設定
    BitBlt(hDestDC, 0, 0, 640, 480, hSrcDC, 0, 0, SRCCOPY); // 転送
    SelectClipRgn(hDestDC, NULL); // リージョン解除
}
DDReleaseDC(DDS_OFFSCREEN1);
DDReleaseDC(DDS_BACKBUF);

DeleteObject(hRgn); // リージョン解放
}
}

```

(2)(1)のプログラムを変更し、CreateEllipticRgn関数で作成した円形のリージョンが使われるようにしましょう。なお、だ円の大きさは適当でかまいません。

(3)以下のプログラムは、CreatePolygonRgn関数で作成したリージョンを使ってオフスクリーンサーフェイス1の画像をバックバッファに転送する関数です。どのような結果になるか確認しましょう。

```

/*****
/*                      リージョン付き転送                      */
*****/
void RgnBitBltBG()
{
    DDColorFill(DDS_BACKBUF, NULL, RGB(0, 0, 0)); // バックバッファクリア

    // 頂点座標設定
    POINT ptVertex[5] = {{320, 6}, {457, 429}, {98, 168}, {542, 168}, {183, 429}};

    HRGN hRgn = CreatePolygonRgn(ptVertex, 5, ALTERNATE); // リージョン生成
    if(NULL != hRgn) {
        HDC hDestDC = DDGetDC(DDS_BACKBUF);
        HDC hSrcDC = DDGetDC(DDS_OFFSCREEN1);
        if(NULL != hDestDC && NULL != hSrcDC) {
            SelectClipRgn(hDestDC, hRgn); // リージョン設定
            BitBlt(hDestDC, 0, 0, 640, 480, hSrcDC, 0, 0, SRCCOPY); // 転送
            SelectClipRgn(hDestDC, NULL); // リージョン解除
        }
        DDReleaseDC(DDS_OFFSCREEN1);
        DDReleaseDC(DDS_BACKBUF);

        DeleteObject(hRgn); // リージョン解放
    }
}

```

(4)(3)のプログラム中にあるCreatePolygonRgn関数の3つ目の引数を"WINDING"に変更し、リージョンがどのように変更されるかを確認しましょう。

(5)以下の関数を入力してTestProc関数で呼び出すようにプログラムを変更し、動作を確認しましょう。

```

/*****
/*                      円形ワイプ                      */
*****/
void CircleWipeBG()
{
    static int nWipeCnt = 0; // ワイプカウンタ
    const int WIPE_TIME = 300; // ワイプ時間
    const double RATIO = (double)nWipeCnt / WIPE_TIME; // ワイプ比率

    const int cx = 640 / 2; // 中心x座標
    const int cy = 480 / 2; // 中心y座標
    const int r = (int)sqrt(cx * cx + cy * cy) + 2; // 最大半径
    const int r1 = (int)(r * RATIO);

    DDColorFill(DDS_BACKBUF, NULL, RGB(0, 0, 0));
}

```

```

HRGN hRgn = CreateEllipticRgn(cx - r1, cy - r1, cx + r1, cy + r1);
if(NULL != hRgn) {
    HDC hDestDC = DDGetDC(DDS_BACKBUF);
    HDC hSrcDC = DDGetDC(DDS_OFFSCREEN1);
    if(NULL != hDestDC && NULL != hSrcDC) {
        SelectClipRgn(hDestDC, hRgn);
        BitBlt(hDestDC, 0, 0, 640, 480, hSrcDC, 0, 0, SRCCOPY);
        SelectClipRgn(hDestDC, NULL);
    }
    DDReleaseDC(DDS_OFFSCREEN1);
    DDReleaseDC(DDS_BACKBUF);

    DeleteObject(hRgn);
}

nWipeCnt++;
if(WIPE_TIME < nWipeCnt)
    nWipeCnt = 0;
}

```

(6)以下の関数を入力してTestProc関数で呼び出すようにプログラムを変更し、動作を確認しましょう。

```

/*****
/*                               星形ワイブ                               */
*****/
void StarWipeBG()
{
    static int    nWipeCnt = 0;           // ワイブカウンタ
    const int    WIPE_TIME = 300;       // ワイブ時間
    const double  RATIO    = (double)nWipeCnt / WIPE_TIME; // ワイブ比率

    const int    wd = 640;              // 背景幅
    const int    ht = 480;              // 背景高さ
    const int    r  = (int)(sqrt(wd * wd + ht * ht) * 1.1); // 最大半径
    const int    r1 = (int)(r * RATIO);

    // 星座標設定
    POINT ptStar[5];
    for(int i = 0; i < 5; i++) {
        const double PI = 3.1415926535897932384626433832795; // 円周率
        const double ANGLE = 2.0 * PI * i * 2.0 / 5.0; // 座標角度
        const int    cx = wd / 2; // 中心x座標
        const int    cy = ht / 2; // 中心y座標

        ptStar[i].x = cx + (int)(sin(ANGLE) * r1);
        ptStar[i].y = cy - (int)(cos(ANGLE) * r1);
    }

    HRGN hRgn = CreatePolygonRgn(ptStar, 5, WINDING);
    if(NULL != hRgn) {
        DDColorFill(DDS_BACKBUF, NULL, RGB(0, 0, 0));

        // 背景転送
        HDC hDestDC = DDGetDC(DDS_BACKBUF);
        HDC hSrcDC = DDGetDC(DDS_OFFSCREEN1);
        if(NULL != hDestDC && NULL != hSrcDC) {
            SelectClipRgn(hDestDC, hRgn);
            BitBlt(hDestDC, 0, 0, 640, 480, hSrcDC, 0, 0, SRCCOPY);
            SelectClipRgn(hDestDC, NULL);
        }
        DDReleaseDC(DDS_OFFSCREEN1);
        DDReleaseDC(DDS_BACKBUF);

        DeleteObject(hRgn);
    }

    nWipeCnt++;
    if(WIPE_TIME < nWipeCnt)
        nWipeCnt = 0;
}

```